

『モモ』における時間性

—— 教育における計画再考 ——

生越 達*

(2010年9月15日受理)

On The Temporality of “Momo”
:Reconsideration on The Plan in Education
Toru OGOSE*

キーワード: 待つこと、生活としての時間、時間の節約、子ども性

教育の計画化がすすんでいる。ミヒヤエル・エンデの『モモ』を読み解くことをとおして、こうした事態をどのようにとらえたらいいのかを考えるのが、この小論の目的である。具体的には、『モモ』において描写されている時間節約のとらえ方に解釈を加えることにより、エンデが現代社会をどのようにとらえ、何が問題であると考えているのかを明らかにしていきたい。

最初に、『モモ』のなかで描かれている非計画的な生き方の特徴を明らかにする。それは、1) 待つということ、と、2) 現在を生きるということ、である。モモはこうした時間の生き方をすることにより、他者と豊かに交流することができるようになる。モモはそのための時間をもっているのである。

だが、いっぽう、現代人は、早さや速さへの欲望を抑えきれなくなり、時間を節約し、計画的に生きることをよいことだと考えるようになっていく。だがエンデは、こうした生き方をすることで、私たちは、いつもいらいらし、現在を楽しめないままに生きるようになるという。私たちは知らないうちに時間を奪われているのである。エンデは、そこで、計測可能な時間ではなく生活としての時間へと目を向けることが必要だと主張している。

このことは、子どもたちへも多大な影響を与える。時間節約を重要と考える大人は、子どもの時間の生き方に恐れをなし、早く大人にしてしまおうと子どもたちを学校へ追いやるからである。私たちは、現代社会において、学校がこのような施設にならないよう、教育の計画化について慎重に考えてみる必要がある。

はじめに

教育においては「計画」を立てることの重要性が強調される。家庭教育はともかくとして、もともと学校教育は計画的に子どもを育てることを目論んで作られた制度であるから、計画が重視されるのは当然かもしれない。たとえば学習指導案、さらには年間をとおしての学級経営案を立てるこ

*茨城大学教育学部

とは授業や学級経営を実施する際の前提であり、そうした計画を立てられない教師はいないはずである。

だが、最近では計画的教育ということが様々なレベルで強調されるようになり、ますます教育が計画によって管理されるようになってきている。授業のレベルだけではなく、学級経営、学年経営、学校経営、さらには県のレベルや国のレベルにまで計画的教育は浸透している。そして計画を立てることは計画の成果にかかわる評価と結び付けられている。教師一人ひとりの個人のレベルから、学校のレベル、さらには県や国のレベルまで計画は評価によって総括され、次の計画へと改善される。教育においてPDCAサイクルという言葉聞くことも多くなった。計画(plan)、実行(do)、評価(check)、改善(action)の循環のなかで教育を行っていかうという発想である。また計画は公表され、計画そのものが評価のまなざしにさらされるようになってきている。それは、客観的な評価を行うためには計画がたてられていることが必要だからである。昨今では、学校経営の方針については、各学校のホームページに載せられ、誰でもが簡単に見ることができるようになっていく。

現代教育にとっての計画の重要性は教育基本法の改正に象徴されている。平成18年改正の教育基本法においては、第17条において教育振興基本計画を定め公表することが規定され、実際に、平成20年7月には教育振興計画が策定された。また改正教育基本法においては、各地方公共団体でも教育基本計画を策定すべきことが定められ、その後、既存の計画が見直されたり、新たに計画が策定されたりしている。現在は、あらゆるレベルで、計画をたて、公表し、そして実行し、評価し、改善するというサイクルで教育を実施していくことが明示されたのである。

このような現代の動向をどのように考えたらいいのだろうか。もちろん計画をたてることは教育にとって最も重要な仕事のひとつである。そうであるにも関わらず、教師の勘に任されてしまったり、無計画に実施されたり、さらにはきちんとした評価をせずに教育の改善が行われないことは問題であろう。そこからは、教育がよくなるのは、これまで客観的に評価を行って来なかったからであるといった言述も生まれる。客観的な評価をどのように行うことができるのかということが教育の眼差しを規定するようになる。

だが、少し中身に入って考えると、事態はそう簡単でないことに気づく。

第一に、教育が一人ひとりの子どもに添うことを目指すとすれば、教師の側からあらかじめ教育内容を決めてしまうような計画は立てられないはずである。どのような教育内容にするのかは、教師が子どもたちと出会い、子どもたちとのかかわりのなかで発見し、子どもたちとともに作り出していくものだと考えることもできるからである¹。もちろん、こうした教育観は、戦後教育が子どもたちを甘やかしたという発想からすると、そもそも問題だということになるのかもしれないが。

第二に、計画をたてるのが、評価可能な計画を立てるということになってしまうと、教育事象をとらえるまなざしがひどく狭いものになってしまう危険性があることになる。短期的に成果がでること、また目に見えるような仕方で成果がでることどうしてもまなざしが収束していくからである。

教育事象を刻々と変化する状況における「出来事」ととらえるならば、計画にとらえられた眼差しはその状況をつかみ損なう可能性が高くなることを意味するだろう。計画を立てること自体は重要である。計画を立てること自体は状況を深く理解する準備を与えてくれるからである。その場合、

計画は最小限、子どもたちが想定される教育場面のなかで、どのような解釈をするのか、どのような動き方をするのかを考えつくしたものである必要があるだろう。教師の側でその必要性を考えただけの計画であってはならない。佐伯は保育計画についてであるが、計画が『即興劇の台本』²であるべきだと述べている。

教育はいつも計画と非計画のあいだにあると言えるのではないだろうか。計画をたてることによって教育を見る眼差しを深める。だが、計画を実施する場面においては、「計画に沿って」行うのは不十分である。子どもたちとのかかわりのなかで、ときに計画を否定し、修正しなければならない。計画を否定し、修正することのなかで、学びの「出来事」を子どもたちとともに生成していかなければならないのである。そして子どもたちと出会うからこそ、そしてその瞬間に一人の人間として働きかけるからこそ、見えてくるものがあるはずだからである³。

そこで教育において計画をどのようにとらえていくべきなのかについては慎重に考えてみることを求められるであろう。

この小論においては、計画に関する示唆をえるために、ミヒヤエル・エンデの『モモ』を読むことにする。『モモ』においては、現代社会への批判がモモという少女をとおして描かれており、当然そこには現代教育への批判も込められていると考えることができる⁴。『モモ』においては、現代社会は管理社会、しかも自己管理の社会として描かれている⁵。そして自己管理そのものが見えなくなってしまう社会の恐ろしさが時間泥棒をとおして語られる。『モモ』に描かれた管理社会を読み解くことをとおして、上記に述べてきた教育の計画化に対して示唆を得るのがこの小論の目的である。

もちろん、現代社会において『モモ』の主張は理解できたとしても、現実離れしていてそこからメッセージを受け取ることはできないと考えることもできるだろう。たしかに学生たちと授業で『モモ』を読んでいても、現実的ではないことが常に問題になる。言いたいことはわかるが、そんなこと言っても、時間を節約しなければこの忙しい社会ではやっていけない。時間を効率よく使わなければ、競争に負けてしまうし自己実現もおぼつかない。他者を待ったり、聴いたりしてはいくら時間があっても足りない。そして結局はやっぱりモモのように生きられないよね、といった結論に落ち着いてしまうのである。だが、小論においては、『モモ』から人生に向き合うときの構えを学ぶという視点に立つことにより、できるかぎり現実的な示唆を得ることを目指していきたい。

1. 『モモ』に描かれた非計画的な時間の生き方

(1) 待つということ

モモは聴くことのできる天才である。モモに話を聴いてもらった人は、それだけで、自分の存在に自信が持てるようになる。「どうしてよいかわからずに思いまよっていた人は、きゅうにじぶんの意志がはっきりしてきます。ひっこみ思案の人には、きゅうに目のまえがひらけ、勇気が出てきます。不幸な人、なやみのある人には、希望とあかるさがわいてきます。たとえば、こう考えている人がいたとします。おれの人生は失敗で、なんの意味もない、おれはなん千万もの人間の中のケチな一人で、死んだところでこわれたつぼとおんなじだ、べつのつぼがすぐに

おれの場所をふさぐだけさ、生きていようと死んでしまおうと、どうってちがいはありやしない。この人がモモのところに出かけて行って、その考えをうちあげたとします。するとしゃべっているうちに、ふしぎなことにじぶんがまちがっていたことがわかってくるのです。いや、おれはおれなんだ、世界中の人間の中で、おれという人間はひとりしかいない、だからおれはおれなりに、この世の中で大切な存在なんだ」⁶。モモに話を聴いてもらうだけで、人は、自分の存在を受容し、自尊感情を取り戻すことができるようになる。

それではいったいモモはどのように人の話を聴くのだろうか。左官屋のニコラと居酒屋のニノとの仲直りをさせる場面で、モモはともかく待つことにする。「そしてどういうことになるか、待つことにしました。なんであれ、時間というものが必要です——それに時間ならば、これだけはモモがふんだんに持っているものなのです」⁷。モモの聴く力を待つことが支えている。そして待つことは、モモが時間を持っているから可能になるのである。だが、時間を持っているとはどういうことなのだろうか。モモに限らずだれでも同じだけ時間を持っているはずではないだろうか。

道路掃除夫ベッポは、変わった人で頭がおかしいと思われている。それは、彼が「なにかきかれても、ただニコニコと笑うばかりで返事をしないからなのです。彼は質問をじっくりと考えるのです」⁸。ベッポは間違っただけを言うまいとしてときには一日も考えつづけるので、彼が返事をしたときには、相手はもう何をきいたのかを忘れていて、ベッポのことを「おかしなやつ」⁹だと考えてしまうのです。けれども「モモだけはいつまでもベッポの返事を待ちました」¹⁰。待つとは、相手の存在を心のなかに入れ続けながら、それでも相手の応答をせかしたり、勝手に決めつけたりしないでおくことを意味している。したがって時間を持っているということは、自分のペースで時間を使うことをせずに相手のペースのなかで自分の時間を差し出すことを意味していることになるだろう。待つことは自分の計画どおりに時間を使うことの断念を求める。

はたして私たちはこうした時間を持っているだろうか。現代社会は、私たちがこうした時間を持つことを不得意にさせてしまったように思われる。鷺田が言うように、現代社会は「待たなくてよい社会」¹¹である。そして待たなくてよいことに慣らされた社会は「待つことのできない社会」¹²にならざるを得ない。つまり、現代社会を生きる私たちは時間を持ってなくなってしまったということなのである。それどころか、現代社会は待つことを否定し、それぞれの人間が自らの立てた計画通りに生き、そこで目標を達成すること、そうした意味で自己実現を果たすことを求める。鷺田は、こうした状況を次のように表現している。「ものを長い眼で見る余裕がなくなったと言ってもいい。仕事場では、短い期間に『成果』を出すことが要求される。どんな組織も、中期計画、年度計画、そしてそれぞれに数値目標を掲げ、その達成度を図らないといけない」¹³。あるいは子どもの教育についても次のように言う。「子どもが何かにぶち当たっては失敗し、泣きわめいては気を取りなおし、紆余曲折、右往左往したはてに、気がついたらそれなりに育っていたというような、そんな悠長な時間など待てるひとはなくなっている」¹⁴。

私たちは待つことのできない社会を生活している。でも、それは悪いことなのだろうか。待たなくてすむこととは便利なことだからである。近くのコンビニではほしいものがすぐに手に入

る。携帯電話を用いれば、遠くの人ともすぐに話せる。メールで連絡もとれる。世界の果てだって飛行機を使えば1日の内に行くことだってできる。待つという無駄を省くことができるし、早さは便利さの証である。私たちが待つことができない対象はもちろん人間だけではない。森羅万象すべてを待つことができないのである。待つには生きている時間のリズムが速すぎる。だから何もかも待てないのである。いっぽう、モモが待つ相手は人間に限らない。「小さな男の子が、歌を忘れたカナリアをつれてモモのところに来てきました。こんどのは、いままでのよりずっとむずかしい仕事でした。カナリアがやっとまたたのしそうにさえずりはじめるまでに、モモは一週間ものあいだ、じっとカナリアのそばで耳をすましていなければなりません。モモは犬にも猫にも、コオロギやヒキガエルにも、いやそればかりか雨や、木々にざわめく風にまで、耳をかたむけました。するとどんなものでも、それぞれのことばでモモに話しかけてくるのです」¹⁵。

それではモモが待つことで、そこに何が生まれているのだろうか。それは次の部分を読むとよくわかる。「モモに話を聞いてもらっていると、ばかな人にもきゅうにまともな考えがうかんできます。モモがそういう考えを引き出すようなことを言ったり質問したりした、というわけではないのです。彼女はただじっとすわって、注意ぶかく聞いているだけです。その大きな黒い目は、あいてをじっと見つめています。するとあいてには、じぶんのどこにそんなものがひそんでいたかとおどろくような考えが、すうとうかびあがってくるのです。」¹⁶。待つことは、それぞれの考えがまとまり言葉として「熟す」ことを助けるのである。モモに聴いてもらっていると、考えが熟していく。機が熟すための触媒、あるいは環境が待つことなのである。

待つことは時間を持つことであつた。そして時間を持つとは自分の時間を他者に与えることである。他者に時間を与えるということは、自分の時間を奪われるということである。つまり、自分のたてた計画どおりに生きることをしないということである。こう考えると、いわゆるカウンセリングにおける聴くことは、モモの聴くこととはまったく異なる事態であることがわかる。カウンセリングでは、たとえば50分という決められた時間で区切られた契約関係のなかで行われる。自分の時間を奪われることがないように現代社会にアレンジされた聴くことがカウンセリングだということができるだろう。

教育に目を向けて考えてみよう。待つことがかわるのは育てることそれ自身ではなく、育つための環境となるということである。計画的に育てることではなく、計画を超えて育つことを可能にする場を待つことが作り出す。そう考えると、待てない社会とは、子どもたちの考えが育つことの難しい社会だということがいえよう。そういう社会になればなるほど、子どもは育てなければならなくなる。そしてできる限り早く育つことが大切だと考える。あるテレビ番組で、公文俊平が、「早くできるのにどうして早くやろうとしないのか」と言っているのを聞いたことがある。まさに計画を立て、無駄を省き、できるだけ早く育てるのが、待たない社会のリズムであろう。私たちは、待てない身体になってしまっている。ちょっと待たされるといらつき、自分の計画どおりに生きられないと焦れる。人のために自分の時間が奪われることなどんでもないということになってしまうのである。だが、これまで述べてきたように、そうした社会は熟すのを待てない社会なのである。

教育のなかに計画が深く入り込んできていることをすでに見てきたが、計画が教育を管理するようになるということは、意図せざる結果とはいえ、学校教育では教師が、家庭教育では親が、子ど

もを待つことができなくなることを意味するだろう。つねに目標にそって効率よく教育成果が上がることへと教師や親の眼差しが集約されていく。たとえば不登校への対応に関しても、早く学校復帰を目指さざるを得ないということが生じる。不登校の子どもの数を減らすことが学校の目標としてあげられる。計画に管理された学校においては、そのような具体的な目標を設定し達成していくほかないのである。

それだけでなく、待てない社会なのに、さらに教育は、待てなさを育てていく。鷺田の言うように、子どもたちは、失敗しながら、機が熟すのを待つような悠長な時間を奪われていく。実際に、子どもたちも待てなくなっている。メールの返事が返ってこないとすぐにいらつき、不安になる。そのいらつきや不安がいじめに発展することも日常的におこっている。昨日夜出したメールの返事が戻ってこないことが次の日のいじめにつながっていく。返事が戻ってこなかった子どもは、グループの子どもたちに、「今日あいつがきたらシカトだからね」と話し、いじめが成立する。それどころか、1時間のうちにメールが返ってこない、イライラし始める子どももいる。

効率よく結果が出ることを大切に社会は、待てない社会であり、そこでは促成栽培が求められる。まずは教師や親が待つことを習うことが必要なのではないだろうか。もちろん待つことを習うことはたやすいことではないだろう。そして時間のかかることでもある。子どものために自らの時間を与えること、自分の生の計画を、一時的にしる、放棄することを求められるからである。

(2) 未来ではなく現在を生きるということ

それでは待つことを習うにはどうしたらいいのだろうか。待つことを習うことは難しい。それは待つこともまた計画のなかに呑みこまれてしまう危険性があるからである。待つことが計画化される。待つという計画が作られてしまう。かといって計画もたてず、子どもとかかわれば待つことができているというわけではない。しかも現代社会において、無計画に生きることは不可能であろう。だとすれば、上記に述べたことはやはり無理な注文だということになるのだろうか。

ベッポの仕事の仕方に注目してみよう。ベッポは掃除夫をしているのだが、自分の仕事が好きで、いつも丁寧に仕事をする。「道路の掃除を彼はゆっくりと、でも着実にやりました。ひとあしすすんではひと呼吸し、ひと呼吸ついては、ほうきでひとはきします。ひとあし—ひと呼吸—ひとはき。ひとあし—ひと呼吸—ひとはき。ときどきちょっと足をとめて、まへのほうをぼんやりながめながら、もの思いにふけます。それからまたすすみます—ひとあし—ひと呼吸—ひとはき———」¹⁷。

ベッポは自分のこうした仕事の仕方について自分で次のようにまとめている。「『とっても長い道路を受けもつことがよくあるんだ。おっそろしく長くて、これじゃとてもやりきれない、こう思ってしまう。』彼はしばらく口をつぐんで、じっとまへのほうを見ているが、やがてつづけます。『そこでせかせかと働きます。どんどんスピードをあげてゆく。ときどき目をあげて見るんだが、いつ見てもこの道の道路はちっともへっていない。だからもっとすごいいきおいで働きまくる。心配でたまらないんだ。そしてしまいには息が切れて、動けなくなってしまふ。こういうやりかたは、いかんだ。』ここで彼はしばらく考えこみます。それからやお

らさきをつづけます。『いちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん、わかるかな？ つぎの一步のことだけ、つぎのひと呼吸のことだけ、つぎのひとはきのことだけを考えるんだ。いつもただつぎのことだけをな。』またひとやすみして、考えこみ、それから、『ひょっと気がついたときには、一步一步すすんできた道路がぜんぶ終わるとる。どうやってやりとげたかは、じぶんでもわからん。』彼はひとりうなずいて、こうむすびます。『これがだいじなんだ。』¹⁸。

ベッポもまた計画に基づいて仕事をするを、具体的に、否定しているように思う。計画にそって生きることは人をせつかにする。結果が達成されたかどうかだか気がなくなってしまい、しかも結果からの距離ばかりを気にしていると、心配になり、疲れてしまう。それよりは、次のことだけを考え仕事をしていると、楽しくなり、結果として仕事もはかどるといふのだ。計画を達成することばかりを考えていると、達成された結果ばかりにとらわれ、仕事を味わうことができなくなってしまう。計画的に仕事をするとは未来を生きることであり、未来を現在化してしまうことであり、したがってこの現在において仕事そのものを楽しむことでもなければ、見知らぬ他者と出会う可能性に開かれていることでもありえない。計画策定段階で想定した現在化した未来をこなしていくことなのである。仕事はいつも「こなす仕事」であるほかなくなってしまう。計画は未来を現在のなかに押し込んでしまふし、計画にとらわれた人間はつねに成果を求めて前のめりになって生きるほかないのである。

これは「いい子」の生き方でもある。こうあらねばならない自分が決まっています、生きることはそのあらねばならぬ姿との隙間を埋めていくことを意味する。そしてあらねばならぬ姿との隙間からつねに自己評価を行い、さらに頑張る。そこには現在を楽しむことや、不意打ち的他人と出会う可能性が閉ざされてしまっている。そんな生き方は窮屈であり、「いい子」がストレスを強く感じるのも理解できるように思われる。

ベッポもまた灰色の男の策略により、「こなす」仕事に追いこまれる。「せかせかと、仕事への愛情など持たずに、ただただ時間を節約するためだけに働いたのです」¹⁹。『モモ』によれば、これこそが現代社会における働き方だということになるのだろう。

2. 計測可能な時間と生活としての時間

(1) 速さ、早さへの欲望

待つことができるモモと待つことのできない私たち現代人、はたしてどちらが豊かな時間を経験しているといえるのだろうか。すでに述べたように、待つことができるモモが「時間を持っている」ということだが、その意味をどのようにとらえたらいいのだろうか。

『モモ』では時間について次のように述べている。「時間をはかるにはカレンダーや時計がありますが、はかってみたとこあまり意味はありません。というのは、だれでも知っているとおりに、その時間にどんなことがあったかによって、わずか一時間でも永遠の長さに感じられることもあれば、ぎゃくにほんの一瞬に思えることもあるからです。なぜなら、時間とはすなわち生活だからです。そして人間の生きる生活は、その人の心の中にあるからです」²⁰。二

つの時間がある。一つは「計測可能な時間」であり、もうひとつは「生活としての時間」である。『モモ』によれば、本当の時間は「生活としての時間」だということになるだろう。灰色の男たちは、目立たないように人々の暮らしの中に忍び込み、時間を盗むことを考える。灰色の男は時間が「生活としての時間」、つまりは「心の中の時間」だからこそ、それを盗むことができる。だが、そのときには時間を盗まれる人間は、その時間を「計測可能な時間」ととらえていることが必要である。節約できるのは「計測可能な時間」だからである。そして「計測可能な時間」を節約することによって「心の中の時間」はどんどん短くなっていくのである。なぜなら時間を節約することによって今現在を「楽しむ」ということが奪われていくからである。ともかく早く処理できれば時間は節約されるということになる。しかも、すでに述べたように、モモにとって時間を持つことは他者に時間を与えることであった。つまり他者との関係性のなかに人生があり、時間があり、現在を楽しむということがある。ところが、時間を節約することによって、時間を持つことができなくなり、つまりは他者と時間をともに過ごすことができなくなっていく。応答することの否定が時間の節約なのである。つまり時間を節約することによって人々は愛することを奪われていくのである。

床屋のフージー氏は、灰色の男にそそのかされ、自分の生活の仕方、つまりは時間の使い方を変える。耳の聞こえない母親とおしゃべりをしたり、映画に行ったり、合唱団の練習に出たり、呑み屋にいったり、友達と会ったり、さらには足のわるい娘に花をもって訪ねたり、一日のことをゆっくりと思いつくことはすべて時間の浪費だということになる。そして仕事はともかく一秒でも早く処理することを求められる。フージー氏は、灰色の男にすべての時間が無駄だと論され、将来のために時間を貯蓄するよう言われる。貯蓄するとは、将来のために現在はその時間を使わずにとっておくことである。将来のために現在を犠牲にすることである。だが、はたして時間はとっておけるものなのだろうか。

灰色の男は、うまくフージー氏をだましてしまうが、フージー氏の手もとには、時間は少しも残らない²¹。フージー氏は、「将来いつかいまとはちがった人生を始められるように、いまから時間をためておこう」²²と考えますが、実はそうはいかない。「『時間を節約すれば、二倍になってもどってくる!』」²³とはいかないのである。フージー氏は、仕事が楽しくなくなり、「おこりっぽい、落ちつきのない人」²⁴になっていった。「彼が節約した時間は、じっさい、彼の手もとにはひとつものこりませんでした。魔法のようにあとかたもなく消えてなくなってしまうのです。彼の一日一日は、はじめはそれとわからないほど、けれどしだいはっきりと、みじかくなってゆきました。あつというまに一週間たち、ひと月たち、一年たち、また一年、また一年と時が飛びさってゆきます」²⁵。時間は、フージー氏の手元に残らないどころか、ますます短くなっていく。

しかも、時間の節約は循環を生みだす。時間を節約すればするほど時間は短くなり、時間が短くなればなるほど時間を節約することが必要となり、時間を節約すればするほど・・・と循環のなかで、ますますフージー氏は追い込まれていく。しかも怖いのは、この循環に陥ってしまっていることが目には見えないということである。しらすらすらうちにこの悪循環は忍び寄ってくる。そしてフージー氏は自らの生活を振り返ることができなくなり、いつのまにか生活の地平を変えられてしまうことになる²⁶。「ほんとうなら、いったいじぶんの時間がどうし

てこうも少なくなつたのか、しんけんに疑問にしていはいはずでした。けれどこういう疑問は、ほかの時間貯蓄家とどうよう、彼もぜんぜん感じませんでした。もものけにとりつかれて、盲目になってしまったのもおなじです。そして、毎日がますますはやくすぎてゆくのに気がついて愕然とすることがあつても、そうするとますます死にものぐるいで時間を節約するようになるだけでした」²⁷。

もちろん、フージー氏は、一つの例にすぎません。そして個人のなかに生じる地平の変化は、さらに多くの人々に生じる地平となることによって、社会を変えてしまう。「フージー氏とおなじことが、すでに大都会のおおぜいの人に起こっていました。そして、いわゆる『時間節約』をはじめ人の数は日ごとにふえてゆきました。その数がふえればふえるほど、ほんとうはやりたくないが、そうするよりしかたないという人も、それに調子を合せるようになりまし」²⁸。時間の節約が時間を大切にすることだという考え方が社会の地平となる。当たり前すぎて誰も疑うことのない常識となる。「時間節約こそ幸福の道！」、「時間節約をしてこそ未来がある！」、「きみの生活をゆたかにするために—時間を節約しよう！」²⁹。私たちの社会はまさにここに描かれている世界そのものだということができらるだろう。「時間を節約（儉約）することは大切だ」ということをもはや私たちは疑うことはできなくなっている。そして時間節約のために多くの発明がなされ、その発明が私たちを幸せにしてくれると考えている。「毎日、毎日、こういう文明の利器こそ、人間が将来『ほんとうの生活』ができるようになるために時間のゆとりを生んでくれる、というのです。ビルの壁面にも、広告塔にも、ありとあらゆるバラ色の未来を描いたポスターがはりつけられました」³⁰。

彼らは遊びにおいてでさえ、時間を無駄にしてはいけなと考えるようになる。遊びでだつて時間を無駄にしないよう一生懸命遊ばなければいけなのである。もたもたと時間を無駄にしてはいけな。無駄な時間をなくすためには、計画的な生活が求められる。つまり、自分の生活を振り返り無駄を削り、計画的に人生を生きることなのである。時間を節約することは計画することと深くかかわっている。灰色の男は人々に計画的に生きることを呼び掛けているのである。

速さへの欲望についてはフロムも次のように述べている。「現代の産業システム全体が、忍耐とは正反対のもの、すなわち速さを求めている。機械はすべて速さを第一条件として設計されている。自動車や飛行機は、私たちをすばやく目的地まで連れてゆく。しかも、速ければ速いほど良い。同じ量の製品を半分の時間で生産できる機械は、古くて遅い機械よりも二倍良いとされる。もちろん、これには重要な経済的理由がある。しかし、他の多くの面と同じく、人間の価値はますます経済的価値によって決定されるようになっている。機械にとって良いことは人間にとつても良いはずだ、という理屈だ。現代人は、何でもすばやくやらないと、何かを、つまり時間を、ムダにしているような気になる。ところが、そうやってかせいだ時間で何をしたらよいかわからず、ただつぶすことしかできない」³¹。

（2）時間を貯蓄すること

時間を貯蓄するとはどのようなことだろうか。お金の貯蓄がお金を今使わずにとつておくこ

とを意味するように、時間を貯蓄するとは時間を今使わずにとっておくことである。つまり現在は時間を使わないことである。そうはいつでも時間を使わずにとっておくことはモノやお金を使わずにとっておくこと同じには考えられない。お金をとっておくことは異なり、本来時間は流れていくものであり、とっておくことはできないはずだからである。したがって時間を節約することは、時間に沿って生じる出来事を速く過ぎ去らせることによって無駄を省くということの意味する。したがって、時間の節約においては、一定の時間のなかでできるだけ多くの出来事を詰め込むこと、また必要のない出来事はそれを省くことを求められているということになる。だからこそ出来事をゆっくりと楽しむこと、味わうことができなくなっていく。しかもそうした楽しむこと、味わうことのない時間は、あとから見ればあっという間に過ぎて行ってしまっているのである³²。

時間を節約し貯蓄することは、ある前兆をもってはじまる。

フージー氏の場合で考えてみよう。フージー氏は、貯蓄前には、生活の空虚感に襲われている。「フージー氏の気持ちも、灰色でした」³³。そして次のように考える。時間の貯蓄へと導かれる前兆は生活のなかで感じる空虚感、無意味感なのである。

「おれの人生はこうしてすぎていくのか。」と彼は考えました。『はさみと、おしゃべりと、せっけんの泡の人生だ。おれはいつまで生きていてなんになった？ 死んでしまえば、まるでおれなんぞもともといなかったみたいに、人にわすれられてしまうんだ。』ほんとうは、彼はべつにおしゃべりがきらいではありませんでした。むしろ、お客をあいてに長広舌をふるい、それについてのお客の意見を聞くのが好きだったのです。はさみをチョコチョコキやるのや、せっけんの泡をたてるのだって、いやなわけではありません。仕事はけっこうたのしかったし、うでに自信もありました。なかんずく、あごの下のひげをそりあげるのは、だれにも負けられないほどじょうずでした。けれどそんなフージー氏にも、なにかもつまらなく思えるときがあります。そういうことは、だれにでもあるものです。『おれは人生をあやまった。』とフージー氏は考えました。『おれはなにものになれた？ たかがけちな床屋じゃないか。おれだって、もしちゃんとしたくらしができてたら、いまとはぜんぜんちがう人間になってたろうになあ！』でも、このちゃんとしたくらしというのがどういうものかは、フージー氏にははっきりしていませんでした。なんとなくりっぱそうな生活、ぜいたくな生活、たとえば週刊誌にのっているようなしゃれた生活、そういうものをばくぜんと思いがいていたにすぎません³⁴。

現代社会には計画的なまなざしが浸透している。ときに自分の人生の目的について考え込むことにもなる。しかも計画的なまなざしのもとでは、人生の目的は成果があがったかどうかで判断される。「仕事がたのしいとか、仕事への愛情をもって働いているかなどということは、問題ではなくなりました—むしろそんな考えは仕事のさまたげになります。だいじなことはただひとつ、できるだけ短時間に、できるだけたくさんのお仕事をすることです」³⁵。エンデは、こうした計画的なまなざしで自分を振り返ることを否定的にとらえている。現在を楽しむこと、味わうことから疎外されてしまっているからである。フージー氏には、灰色の男につけこまれる隙ができてしまっているのである。というよりも、自分の人生を空虚に感じることで体が、すでに現代社会のなかで時間貯蓄を強いられた第一歩なのである。何もかもがつまらなく色あせて見え、自分の人生の空虚さを持って余すとき、時間貯蓄の誘惑が忍び込んでくる。自分の人

生の意味を問うような問いは、極めて現代的な問いなのだともいえるだろう。人生の意味への問いが先にある、時間の貯蓄が行われるのではなく、時間の貯蓄を重視する社会が、私たちに人生の意味を問わせるのである。

実際に子どもたちから、人生の意味を問われるとき、ふとモモを思い出す。成績が学年でトップクラスの子どもたちが、なぜ勉強するのかと問い、何で生きなければならないのかと問うとき、その子は、人生の意味を問わなければならないこの社会に素直に反応しているだけかもしれないなあと思うことがある。

結局、こうした問いにたいしては、結果で答えざるを得ない。そして結果に至る計画については非常に丁寧と考えられることとなる。ちょっとした時間も無駄にしないで、どうしたら時間が節約できるのかについては細やかに計画を立てられるのである。だが、さてその計画の結果どのような成果が得られ、またその成果がどのような意味をもっているのかについては、決してはっきりとしているとは言えない。成果のもつ意味について問われることはない。死ぬ前にたいそうな成果をあげなければいけないのか、死んでしまったあとにも人々に覚えていられるような人間にならないといけないのか、ひとかどの人物にならなければいけないのか、たかがけちな床屋じゃだめなのか、という問いは抑え込まれてしまう。そしてもっときちんと生きて、もっと時間を貯蓄すれば、もっと結果を残せるはずだと考えるようになる。だが、社会によって強いられた問いに対する答えは、フージー氏のように、社会通念にそった誰にでも通用するような漠然とした生活なのであり、そこには私たち自身はいないのである。私たちは、漠然としたプレッシャーを感じて焦り、そしてますます時間の節約に追い込まれていく。フージー氏もまた灰色の男に次のような言葉を言われて、時間の節約へと駆り立てられていく。「『いいですか、フージーさん。あなたははさみと、おしゃべりと、せっけんの泡とに、あなたの人生を浪費しておいでだ。死んでしまえば、まるであなたなんかもともといなかったとでもいうように、みんなにわすれられてしまう。もしちゃんとしたくらしをしていたら、あなたはいまとはぜんぜんちがう人間になっていたでしょうにね。ようするにあなたが必要としているのは、時間だ。そうでしょうか？』」³⁶。自分の人生に疑問を持ち始めたフージー氏は、「ちゃんとしたくらし」などという不明確な言葉に支配されてしまうのである。そして「人生の総決算」³⁷を、計算的時間によって細かに評価し、計画することへと追い込まれていく。ただただ「将来いつかいまとちがった人生を始められるように、いまから時間をためておこうという決心は、決して抜けない鉤針のように彼の心にしっかりとくいこんでいました」³⁸といった生き方を強いられるようになる。

時間を貯蓄するということは前傾した生き方を強いる。その場合、すでに述べたように余暇でさえせわしく遊ぶことになるのだが、それはいつも未来を現在のなかに組み込んでいくことで白紙の現在を消し去ろうとすることを意味する。こうした生き方にとって内容のつまっていない現在は恐怖であろう。手帳には先の計画はぎっしりと記入され、時間を無駄にせずにそれをこなしていくことで安心できる。こうした生き方にとって待つことは、現在を白紙にして相手に譲り渡すことであって、やはり耐えられない時間だということになるだろう。時間を節約する人（「時間貯蓄家」）にとっては、真っ白な現在は耐えがたいのである。「彼ら（時間貯蓄家）がいちばん耐えがたく思うようになったのは、しずけさでした。彼らはじぶんのたちの生

活がほんとうはどうなってしまったのかを心のどこかで感じとっていましたから、しずかになると不安でたまらないのです。ですから、しずけさがやって来そうになると、そうぞうしい音をたてます」³⁹。計画をたて実行するとは、自分の生活から静かな時間を排除し、ともかく計画をたくさん入れて、実行していくことなのである。待つ時間や、静かな時間を排除し、できるかぎり短時間にできるだけ多くの仕事をしようとする。「時間は貴重だ—むだにするな！」「時は金なり—節約せよ！」⁴⁰。現代を生きている私たちにはもっともな主張で、到底反論できないような標語だが、実はこれらは次から次へと仕事をこなしていく前傾姿勢の生き方を私たちに強いる言葉なのである。フロムは集中の欠如と一人でいられないことを関連づけて次のように述べている。「この集中の欠如をいちばんよく示しているのが、一人でいられないという事実だ。ほとんどの人が、おしゃべりもせず、タバコも吸わず、本も読まず、酒も飲まずに、じっとすわっていることができない。そんなふうに行っていると、そわそわと落ち着かなくなり、口や手で何かせずにはいられなくなる。」⁴¹。さらには次のようにも言っている。「一人でいると、じきに、その日の予定についてあれこれ考えたり、今晚はどこにでかけようかと考えたり、頭のなかをからっぽにするどころか、頭をいっぱいにくれらることなら何でも考える」⁴²。現在という時間に耐えられずにこの現在を未来で埋めようとする。つまりは計画で現在を埋めようとするのである。

このような生き方を強いられている私たちが、ふと立ち止まった時に、人生の意味への疑問に襲われることはいたって自然なことに思われる。恐ろしいのは、そうした疑問に気づくこと自体が私たちから奪われてしまっていることである。「時間をケチケチすることで、ほんとうはぜんぜんべつのかなにかをケチケチしているということには、だれひとり気がついていないようでした。じぶんたちの生活が日ごとにまずしくなり、日ごとに画一的になり、日ごとに冷たくなっていることを、だれひとり認めようとしませんでした」⁴³。このように真の問題を抑え込んでしまうことが、人々を無力感で支配したり、またいらいらさせたりするのだが、真の問題が見えなくなってしまう以上、私たちは無力感やいらいらを、計画をたて、仕事を頑張り、成果を出すことで抑え込むしかないという悪循環を生きざるを得ないのである。人々はずねにいらいらした気持ちを隠し持っている。フージー氏も灰色の男に会い時間を節約するようになってやはりいらいらと生きるようになる。その姿はジジの言葉をとおして次のように描かれている。「『ついこのまえ、おれは町でむかしからの知り合いに出会ったんだ。フージーっていう床屋だがね。しばらく会っていなかったが、こんど見たときには、すぐにはだれだかわからなかった。やつはそれほど変わっちゃってて、いらいらして、おこりっぽくて、ゆうつそうなんだ。いぜんはいいやつで、歌はうまいし、どんなことにもやつ一流の考えを持っていたんだがな。それがきゆうに、なんにもするひまがなくなったって言うんだ。ありゃあもうただの抜けがらで、フージーなんぞじゃない、わかるかい？ それがあいつひとりきりのことなら、フージーはすこしおかしくなったと考えればすむ。ところがどっちを見ても、そんな人間がやたらと目につくんだ。しかもどんどんふえている。いまじゃおれたちのむかしなじみでさえ、そうなり始めてる！ まったく、伝染性の気がへんになる病気なんてのがあるんじゃないかと考えたくなるよ！』」⁴⁴。こうして社会全体がいらいらとして、憂鬱で、いつも何かに追いかけられているようになっていくのである。その場合、時間の節約は個人の問題ではなく社会

全体の課題となっていく。社会が時間の節約に正当性を与えてくれるのである。

居酒屋ニノとその妻リリアーナとの会話のなかには成功することが大切であること、そのためには思いやりを犠牲にせざるをえないことが述べられる。毎晩安い赤ぶどう酒一杯で長居をするお客を追い出そうとするニノが妻と言い争いをする場面である。『一生けちな居酒屋の主人なんかで終わるのなんざ！ おれだって、いっぱい成功はしたいんだ！ それが変わるいことだっていうのか？ おれはこの店をはんじょうさせたいんだ！ りっぱな店にしたいんだ！ それもおれだけのためじゃない。おまえや、おれたちの子どもを思っただけのことなんだぞ。それがわからないのか、リリアーナ？』『わからないとも』と、リリアーナはきびしく言いかえました。『思いやりのないやり方でしかやれないなら——こんなふうな始め方なら——あたしはごめんだよ！……』⁴⁵。

こうした仕事の仕方においては、自分らしさは失われていく。ニノはリリアーナとの言い争いの後、次のようにモモに言う。『リリアーナの言うとおりにかもしれんな。じいさんたちがなくなってからは、おれにもじぶんの店がなんとなくじぶんの店じゃないみたいに思えてな。ひえびえとしてるんだ、わかるかい？ じぶんでももういやになったよ。まったく、どうしたらいかわからないんだ。だがな、いまじゃどこの店だってそうやっている。どうしておれだけがちがうやり方をしなくちゃなんねえんだ？ それとも、おまえはそうしたほうがいいのか？』⁴⁶。

3. 子ども性の排除と施設の必要

これまでの考察のなかで、現代人が待つことを不得意にしていること、そして計算的時間を生きていてプロセスではなく成果が重要だと考えていることを明らかにしてきた。私たちは現在を仕事で埋め、未来を現在化しつつ生きることを推奨される。こうした生き方はひとことでいえば計画的な人生を送るということになるだろう。つまり、私たちは時間を無駄にしないでできるだけ早くできるだけ大きな成果を上げること、そのためには計画をたてて一瞬たりとも無駄にしないことが重要だということになる。だが、エンデは、これまで述べてきたように、こうした生き方に疑問を投げかける。現代人である私たちにとって「時は金なり」、「時間を大切にしろ」という言葉は、そのまま、何もしない時間はできるかぎりなくし、単位時間当たりできるかぎり大きな成果をだせということの意味し、そのことは決して疑えない事実になってしまっている。こうした考え方は自明であるため、もはや問うことそれ自身が不可能になっている。だが、エンデにひきつけて考えてみれば、時は金であり、時間を大切にすることこそ、むしろ無計画に生きることが必要だという考え方もあるはずなのである。

計画的に生きることは現在という時間の質を問うことを禁止する。だからこそ時間を貯蓄するといった発想が成り立つのである。現在という時間を犠牲にして将来のためにためておく。このような考え方は、ちょっときくとおかしいことに見えて、実際に私たちは、そうした生き方に慣らされている。「将来いい生活ができるように今はやりたくないけれども一生懸命勉強をする」という考え方は、ごく普通の考え方である。そして時間を節約し、貯蓄するという考

え方は「利子」⁴⁷という考え方を生む。時間が利子を生むということはいま時間を貯蓄しておけば将来何倍にもなって戻ってくるということだろう。いま現在を犠牲にしたとしても将来により多くの時間が与えられ、豊かな生活を可能にするのが「利子」ということだろう。こうした考え方は時間について考えるとおかしいが、お金に置き換えればよくわかる。お金を今使わずに将来のために貯蓄しておけば将来はより多くのお金になって私たちの生活を豊かにしてくれるという考え方である。現在を生きることをフロムは「集中」という言葉で語っている。「集中するとは、いまここで、全身で現在を生きることである。いま何かをやっているあいだは、次にやることは考えない」⁴⁸。そしてフロムはこの集中の例として「相手の話を聞くということ」を挙げている。そして聴くことによって、疲れるどころか「人はますます覚醒し、そして後で、自然で快い疲れがやってくる」と述べる。こうしたフロムの考え方はエンデと共通である。

それでは、時間を節約し貯蓄するという生き方は、この小論のもともとのテーマであった子どもたちへの教育ということを考えてときにどのような意味をもつのだろうか。

教育は子どもを社会化するという側面と子どもに添うという二つの側面からできている。そしてこの二つの側面は、互いに矛盾しながらも、バランスをとりつつ教育活動を成り立たせている。だが、今日では、このバランスが崩れてしまっている。したがってエンデは、社会化の方向に傾いてしまった振り子を戻そうとしていると考えることができるだろう。別の言い方もできるだろう。教育の計画化は、子どもを社会化するには有利である。できるかぎり早く成果をだそうとするときには計画を立て、実行し、評価し、改善するというPDCAサイクルを循環させていくことは、必要となる。そして計画を実行するためには、計画を実行するための組織（つまりは学校）が存在していることが望ましい。『モモ』のなかでも、時間泥棒登場後の子どもたちの変化が描かれている。

最初に描かれているのが、子どもたちが遊べなくなってしまったことである。それは遊びには想像力が必要だからなのだが、同時に遊びは計画と矛盾するからである。ほんらい子どもという存在は計画になじまず、したがって「子どもの時間を節約させるのは、ほかの人間の場合よりはるかにむずかしい」⁴⁹。灰色の男たちにとって、「子どもこそわれわれの仕事にとってもっとも危険な存在」⁵⁰なのである。だからこそ、時間貯蓄家になり下がった大人たちにとって「おとなは子どもがいやになった」⁵¹。

そこで子どもたちの子ども性を封じこめつつ、できるだけ早く子どもたちを大人にしてしまうことが必要となる。

『ひとりではうり出さればなしの子どもがどんどんふえているのは、こまったことだ。だが親をせめるわけにはいかん。なにしろ現代じゃ、子どもを十分に世話してやれるだけの時間が、親にはないんだからな。だが市当局こそ、そのための対策を考えねばならん立場にあるはずだ。』……『放置された子どもというのは、』と、またべつの人が声をあげました。『道徳的に墮落し、非行に走るようになります。市当局は、こういう子どもが野ばなしにならないよう、対策を講ずるべきです。施設をつくって、そこで子どもたちを、社会の役に立つ有能な一員に教育するようにしなくてははいけませんね。』⁵²。ここには子どもの教育のための一つの考え方が示されている。それは子ども性を抑え込み、管理し、そして早く大人にするということ

である。子ども性は秩序を乱す悪であり、管理しなければならないのである。したがってまた子どもは教育により早く立派な大人へと育てあげなければならない。「『子どもは未来の人的資源だ。これからはジェット機やコンピュータの時代になる。こういう機械をぜんぶ使いこなせるようにするには、大量の専門技術者や専門労働者が必要ですぞ。ところがわれわれは、子どもたちをあすのこういう世界のために教育するどころか、あいかわらず、貴重な時間のほとんどを、役にも立たない遊びに浪費させるままにしている。このようなことは、われわれの文明にとって恥辱だし、未来の人類にたいする犯罪ですぞ！』⁵³。教育は計画と結びつき、子どもは人的資源として眼差される。遊びは否定され、役に立つことばかりが求められる。それが「<子どもの家>と呼ばれる施設」⁵⁴という学校である。子どもたちもまた計画的人材育成のなかで前倒しの人生を生きることに慣らされていく。

そのことが典型的に示されているのが「遊戯の授業」⁵⁵である。役に立つことから最も遠いはずの遊びまでもが役に立つことへと方向づけられ、計画的に実施されるのである。遊びでさえも「ためになる」から行われるのである。

子どもたちはこのようにして「わたし」から「人的資源」へと変貌していく。当然、「わたし」でなくなってしまうのであるから、自分を尊敬することもできなくなる。時間が持ち主から切り離され貯蓄銀行に預けられることは人間から「わたし」を奪うことでもあるのだ。

「わたし」を奪われた人間は無気力という病気に犯されていく。「『はじめのうちは気のつかないけどだ、ある日きゅうに、なにもする気がなくなってしまふ。なにについても関心が持てなくなり、なにをしてもおもしろくない。だがこの無気力はそのうちに消えるどころか、すこしずつはげしくなつてゆく。日ごとに、週をかさねるごとに、ひどくなるのだ。気分はますますゆううつになり、心の中はますますからっぽになり、じぶんにたいしても、世の中にたいしても、不満がつのってくる。そのうちにこういう感情さえなくなって、およそなにも感じなくなってしまふ。なにもかも灰色で、どうでもよくなり、世の中はすっかりとおのいてしまつて、じぶんとはなんのかかわりもないと思えてくる。怒ることもなければ、感激することもなく、よろこぶことも悲しむこともできなくなり、笑うことも泣くこともわすれてしまふ。そうなる心の中はひえきつて、もう人も物もいっさい愛することができない……』⁵⁶。そしてこの状態をマイスター・ホラは「致命的退屈症」⁵⁷と呼んでいる。

こうした記述は、現代の子どもたちの状況、さらには私たち大人の状況を的確に表現しているようにも思える。

おわりに

モモにとって、時間は他人に分け与えるものであった。だからこそ、灰色の男たちは、モモを友達から引き離すことでモモを追い詰めようとした。待つことができることは、モモが時間を持っているからだ、それは他者に無条件に自分の時間を差し出すことを意味する。いっぽう、計算される時間は、自己実現のために時間を節約することであり、計画的に時間を使うことを意味する。だが、計画的に生きることは、人を他者から引き離してしまうことになる。そして結局、他者と引き離された人は自らもまた「わたし」であることから引き離され、人的資

源になってしまうのである。

「わたし」であることにとって他者とともにあることは必要なのである。つまり待つことができることが「わたし」であることにとっても必要だということになるだろう。時間を心の中から切りはなして節約し、そして計画的な人生を送ることで「わたし」は「わたし」であることができなくなり、そして致命的退屈症に陥っていく。このように考えると『モモ』は教育を計画のなかに閉じ込めていくことの危険性を描いた物語だということができるだろう。教育は計画のなかに閉じ込めることはできないのである。それは、教育とは、他者とともに紡いでいく物語でなければならないからである。

注

- 1 この点については、佐伯胖.2001.『幼児教育へのいざない』（東京大学出版会）pp.179-182
- 2 同書、p.181
- 3 教育におけるこうした側面は強調しても強調しすぎることのないほど重要である。それはたとえば武田常夫の実践などをみるとよくわかることである。
- 4 教育に関しては、エンデにはルドルフ・シュタイナーの強い影響が存在している。
- 5 施設が出てきたりする点は、フーコーを思い起こさせる。
- 6 ミヒャエル・エンデ.1976.『モモ』（岩波書店）pp.22-23
- 7 同書、p.24
- 8 同書、p.47
- 9 同書、p.47
- 10 同書、p.47
- 11 鷺田清一.2006.『『待つ』ということ』（角川書店）,p.7
- 12 同書、p.7
- 13 同書、p.8
- 14 同書、pp.8-9
- 15 ミヒャエル・エンデ、上掲書、p.29
- 16 鷺田、上掲書、p.22
- 17 ミヒャエル・エンデ、上掲書、pp.47-48
- 18 同書、pp.48-49
- 19 同書、p.243
- 20 同書、p.75
- 21 同書、p.89
- 22 同書、p.90
- 23 同書、p.91
- 24 同書、p.91
- 25 同書、p.91
- 26 こうした悪循環によって、人間が生の地平が知らないうちに歪んでいってしまうことはしばしば生じることである。
- 27 エンデ、上掲書、p.92
- 28 同書、p.92
- 29 同書、pp.92-93
- 30 同書、p.92
- 31 エーリッヒ・フロム.1991.『愛すること新訳版』（紀伊國屋書店）pp.163-164

32 もちろん、時間感覚については、そんなに単純ではないだろう。時間を節約した場合、身体のリズムは速くなっているために、経験しているときには時間は長く感じられるはずである。出来事はスローモーションで過ぎていくことになるので。ところが、あとから振り返って見るとき、楽しんでない時間、味わっていない時間は凝縮してしまっているために短く感じられるのである。ここで短くなるというのは、想起する時間のことである。

33 エンデ、上掲書、p.76

34 同書、pp.76-77

35 同書、p.94

36 同書、p.79

37 同書、p.85

38 同書、p.90

39 同書、p.93

40 同書、p.94

41 エーリッヒ・フロム.1991.『愛すること新訳版』（紀伊國屋書店）、p.163

42 同書、p.167

43 同書、p.95

44 同書、p.106

45 同書、p.113

46 同書、p.114

47 同書、p.87

48 エーリッヒ・フロム.1991.『愛すること新訳版』（紀伊國屋書店）、p.170

49 エンデ、上掲書、p.154

50 同書、p.154

51 同書、p.102

52 同書、p.246

53 同書、pp.246-247

54 同書、p.247

55 同書、p.286

56 同書、pp.321-322

57 同書、p.322